

# あ と が き

令和3年1月、4年後に気象業務がはじまって150年になることから、「気象百五十年史（仮称）」を作成することとなり、編纂委員会が設置された。

第1回編纂委員会では、編纂の基本方針が議論されるとともに、多くの委員からこれまで「気象百年史」を活用してきたとの発言があり、我こそは一番良く読んだと競い合うかのような場面もあった。

新しい業務を担当することになった時や、これからの気象業務を展望するうえで、「気象百年史」は必須の道標となっていた。一方、百年史の執筆者の中には名だたる文筆家の名前もあり、編纂には多くの人的・経費的資源も投入されたと記録されている。これほど立派なものではないにしても、我々の世代同様に、後世にも業務の発展・終焉等の経緯をしっかりと伝える必要があるとの認識となった。

その後、各部各課室で元資料となる基礎年表等の作成は進められたものの、編纂開始当初の意気込みは徐々に薄れ、このままでは150年目の気象記念日での発行が危ぶまれる事態となった。そのため、令和6年度には企画課に専任の体制が設けられ、関係各部署でも急ピッチで部門史の執筆・査読などが進められた。

最近の50年を振り返ると、高度情報化社会と呼ばれた時代もあったように急速に進展する情報通信技術を背景に、観測・予測技術の進歩も相俟って、大気海洋・地震火山など気象庁が担当する各分野で監視・予測能力を向上させ、情報改善を続けてきた歴史でもあった。

しかし、これはその100年前からの先人の汗と努力の積み重ねの上にあり、その志は、自然科学への探求はもとより、自然災害から如何に命や財産を守るか、情報をどのように活用し社会・経済活動に役立てていくか、という同じものであった。

一方、災害を契機に、様々なツールや情報、伝え方を改善しても、自然はそれを上回る多様な様相を示し、終わりなき戦いのようでもあった。東日本大震災では、人間の力が自然の驚異に比べると、如何に微力であるかを思い知らされた。

他方、気象業務には継続してこそ意味のある面もあり、それが時として、新たな業務展開に繋がっていくものもあった。一例はオゾン層の破壊や気候変動など地球環境問題への対応である。

気象業務は、人々の生活や営みと密接に関係しており、だからこそ常に多くの国民からの批判も受け、しばしばマスコミや関係分野の方々との緊迫した議論を経て、よりよい情報に改善してきた歴史でもあった。一方では、それ故、新しい情報も国民生活に定着してきた面も大きかった。

一方で、気象業務は地球科学の広範にわたる分野を担当してきたからこそ、災害時に迅速・的確に対応できた面もあった。阪神・淡路大震災や東日本大震災後の被災地には、寒くなる・風が強くなる等の気象予測が重要であり、こうした際には、臨機に気象情報の提供に努めてきた歴史でもあった。

環境分野について見ると、公害による大気汚染が深刻となった際には、スモッグ気象情報の発表を行い、それが改善されたと思った次には越境大気汚染が深刻となり、全般スモッグ気象情報を発表する、という経験もあった。

南極観測にあたった当庁の職員がオゾン量の低下を観測し、それがオゾンホールが発見、更にはオゾン層破壊物質の世界的な規制に繋がり、現在では、オゾン層は徐々に回復に向かっていている。一方、地球温暖化問題においては、当初は地球の寒冷化も危惧されていたが、早い段階から温暖化の警鐘を鳴らす役割を果たしてきた。しかし、この問題は現代の人間活動そのものに起因しており、対策は容易ではなく、その進行による大雨や熱波等は深刻度を増し、その対応は新たな課題となってきた。

こうした気象業務の歴史の編纂にあたっては、分野ごとに業務の変革の速度や、社会とのつながり方も異なっており、編纂作業には多くの苦労もあった。

分野横断的な業務はどこで詳しく記載するのか、粒度や平仄・表記をどの程度揃えるのか、正確さをどのように確保するのか等々、悩ましい点も多々あったが、編纂に関わった多くの方々の尽力により、今般の出版に至っている。

こうして出来上がってみると、観測そのものにおいても、データを集めることにも、それを加工・処理・予測し情報としてまとめ、更には活用していただく場面にも、様々な工夫や努力の跡が記されている。新しい業務を開始するとき、継続するとき、新たな局面に遭遇したとき、そしてまた役割を終えた業務を終了するときにも様々な工夫や努力がなされている。

編纂にあたっては、できるだけ後世の検証にも耐えうる内容とすることに努めてきたが、記憶違いや過去資料の読み間違いが皆無とはいえない。

しかし、ここに記載された業務の歴史は、今後の業務発展の礎となることは間違いないと確信している。

気象業務がいつの時代も人々の生活に寄り添って、一方では最新の知見や技術を駆使し、国民との議論を積み重ねて発展していく、「気象百五十年史」がそうした一助となれば幸甚である。